

君と一緒に

編む時間



「……野さん、宇野さんっ！寝てませんか？」

俺は、はっとなって背筋を伸ばした。黒板の前に立っている先生が、怖い顔でにらんでいる。

「すみません」

首をすくめて、ぺこりと頭を下げる。やばい、また寝ちゃったよ。この窓際の席が悪いんだよなあ。冬なのに日当たり良くてあったかいから、ついうとうとしちゃうんだよ。よし、とりあえず、他のことを考えよう。えーっと、家に帰ったら、すぐにおやつを食べて、それから何を編もう。昨日まで編んでいた手袋は、ようやく完成したし。夜中までかかったけど。そういえば、家族の誰も使ってくれない帽子、ほいいて毛糸にしちまおう。最近、母さんも父さんもねーちゃんも、俺が編んだもの、使ってくれないんだよ



作・佐藤佳代
絵・北沢優子

なあ。試し編みもいいよな。どの編み図を試そうかな。

あー、早く家帰って、編み物したいな……。

考えているうちに、また頭ががくつと落ちた。

「宇野さん！」

先生の声が一オクターブ高くなった。

俺には、友だちには言えない趣味がある。それは編み物。ばーちゃんが元気だった頃、冬になるといつも、こたつに入って編み物をしていた。それを、じーっと眺めるのが好きだった。ばーちゃんがリズムミカルに編み棒を動かすと、どンドン編み目が増えて形になっていく。まるで魔法みたかった。

俺もやってみたくなり、ばーちゃんに教えてもらって編み始めたのが、幼稚園の年長の時。今は六年生だから、編